

予感

平べったいところで生きていた。

目前のことに、あたふたオロオロの毎日。

ある日、大切な人が、

平べったい場所を軽々と離れ、

私は空を掴む必死の手を持っていることを知った。

上なのか下のなのか、

右なのか左なのか、

過去なのか未来なのかもわからない。

私はあちこちに手を伸ばし

透明で強い願いの糸と

涙の糸をかける。

平べったい場所に立っている。

しかし、今までと違う手応え。

ふくらみのような

突起のような

ひっかかりのようなものが

あちこちで、この手に触れる。

突き放されていないかすかな安心。

私を包む大きな世界の、存在の予感。